



外国語学習のオマケ

町田 和彦 Machida Kazuhiko (東京外国語大学)

「やさしい言語」と「むづかしい言語」があるときよく言われます。新学年を迎えた大学キャンパスの片隅での、選択言語をめぐる情報交換は今も昔も変わりありません。いわゆる「やさしい言語」や「むづかしい言語」の判断に科学的根拠はないはずですが、日本ばかりでなく外国でもよく言われていて、何となく納得してしまう不思議な説得力があることも確か。でもその言い分を集約するとどうやら、学習者の母語と似ていれば「やさしい言語」、似ていなければ「むづかしい言語」ということのようにです。

私が専門にしているインドの公用語ヒンディー語は、日本の学生たちには比較的「やさしい言語」のようです(今に思い知るぞ)。彼らの言い分の1つは、語順が主語、目的語、動詞の順で日本語と同じであること。しかし世界の言語の語順を調べた学者によると、日本語と同じ語順の言語が最も多いそうで、「やさしい言語」の基準がいかにか当てにならないかということです。ちなみに、ヒンディー語は系統的には印欧語族に属し、英語の遠い親戚にあたります。印欧語族の中でも、日本語と同じ語順の言語が多数派で、英語などの語順はむしろ少数派です。

「やさしい言語」や「むづかしい言語」という評価は、どちらかという自分がどれだけ修得(試験勉強?)に苦勞するかという、いわば自己中心的な受動的評価です。一番肝心な、音声を通じて自分の考えを相手に正確に伝える「むづかしさ」の観点はあまりないような気がします。

ヒンディー語には、日本人には「タ」(無声音)や「ダ」(有声音)にしか聞こえない音がそれぞれ4つもあります。専門的に言うとしてべて破裂音で、無気音か有気音か、舌先の触れる位置が上歯の裏(歯音)か歯茎よりもやや後ろ(反り舌音)かの違いです。

これで、計4種類の組み合わせになります。日本語や英語には無気音・有気音の区別はありませんし(どちらの発音もOK)、また「タ(t)」や「ダ(d)」の発音で舌の触れる位置が歯茎を中心に多少前後にずれても誰も気にしません。でもインド人にとっては、これら4つの音は全く違う音で、当然これらの音をあらわす文字も違います。

苦勞して外国語(ただし英語以外)の発音の区別を克服すると、ご褒美に本来の目的とは別に必ず1つオマケがついてきます。それは、その言語を母語とする人たちの英語の発音が理解できるようになることです。ヒンディー語を例にとれば、インド人の話す英語を聞き取るコツ、インド人のような(つまりインド人が理解しやすい)英語を話すコツを身につけることができます。というのは、英語のような外国語の個々の音にたいして、ヒンディー語の限られた音のレパートリーの中から、規則的に音が割り当てられるからです。その規則が、コツの中身ということになります。

現在世界で話されている英語(Englishes)は実にさまざまです。言語の数だけ英語が存在します。そこは、I think that ... を「アイ・シンク・ザット」(日本人)とか「アーイ・ティンク・ダト」(インド人)とか発音する人々が出会う世界でもあります。多言語国家インド(人口約12億人)で、あなたも言語のグローバリゼーションを体感してみませんか。

まちだ かずひこ

1951年生まれ。東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所教授。ヒンディー語を中心とする「インド系諸言語と文字」研究の第一人者。著書に、『ニューエクスプレス ヒンディー語』(白水社)など多数。ホームページ「ヒンディー語の世界へようこそ」。